

時間と存在の再現

仲原 孝

非常に限られた時間の中で、豊富な内容を発表しなければならない必要上、今回は、口頭では本質的な論点だけをできるだけ簡潔に話し、それを論証するために必要な資料などについては、口頭で読み上げることは割愛して、配布するプリントを必要に応じて確認して頂く、という方式をとることを、あらかじめお断わりしておきたい。以下に示すのは、現在（2007/08/20）時点での発表の構想の要旨である。

(A) 序論

発表の目的——『存在と時間』公刊部分の執筆時点における「時間と存在」の構想を具体的に再現すること。そして、ハイデガーが「時間と存在」を公刊できなかった理由の特定。

(B) 「時間と存在」の構成

§ 01. 『論理学』講義（1928）における「時間と存在」の構想

1928年夏学期の『論理学』講義の Anhang (S. 196-202) に提示されている「時間と存在」の構想（ただし「第1章」「第2章」という呼び方はあくまで仮称）。

……第1章：「存在問題の〈ときの〉解明」

……第2章：『「転換」と『メタ存在論』』

（存在論： 存在者→存在）

（メタ存在論： 存在者←存在）

§ 02. 『論理学』講義での構想と『存在と時間』執筆時点での構想との関係

『論理学』講義に示されている構想が、『存在と時間』執筆時点（1926年）での構想を、少なくとも原理的・本質的な点ではそのまま提示したものであることを、各種の根拠に基づいて立証する。

- ・ 1926年夏学期講義『古代哲学の根本諸概念』（Ga22, S. 106）
- ・ 『存在と時間』において、哲学がその出発点へと「打ち返す」という往復運動を行なうものであることを語っていること（SuZ, S. 38, 436）。
- ・ 現存在分析論を存在一般の理念に基づいて「反復」する課題（SuZ, S. 333）。

(C) 存在一般の意味としての「とき性」

まず「時間と存在」の「第1章」について。すなわち、「とき性」はいかなる意味で、存在理解一般の地平であるか。

§ 01. 存在の「外部性」

「とき性」(Temporalität)とは、時間性がそこへと向かって「脱自」してゆく「地平」を意味している。現存在が、それ自身に属する領域を「脱して」、ある意味でそれ自身の「外部」と呼びうるような場所へと関わる時に、現存在は存在の真のあり方に会おうのだ、とハイデガーは考えている。

現存在がそれ自身の「外部」に出会う状況とは、現存在がもはや「企投」を遂行しえなくなるという状況である。〈企投の破綻〉。具体的には、道具の故障や不在など(SuZ, § 16)。「不安」。

§ 02. 存在の「外部性」の場所としての「とき性」

企投の破綻 = 〈将来の可能性〉と〈現在の現実性〉との間の断絶
= 「先駆」

本来的時間性 = 企投の根源的破綻
= 「とき性」への脱自

§ 03. 「存在一般の意味」としての「とき性」

「存在一般」 = 「実存」と「最広義における眼前存在」との統一性

現存在が自己の死の可能性に直面することが、一切の企投を根源的に破綻させる。死は現存在の遂行する一切の企投の「終末/限界」(Ende)である。現存在は、まさにこの根源的な「有限性」(Endlichkeit)に直面することによって、同時にこの限界の「外部」が存在することを知る。つまり、存在者全体が、企投しえないにもかかわらず否応なしに存在しているということを知る。

したがって、実存の真理としての有限性の開示性は、同時に最広義の眼前存在の開示性でもある。したがって、「とき性」は両者の共属的開示性を可能にする制約であると言えることができる。

(D) 「転回」と「挫折」

「時間と存在」の「第2章」の内容を再現することは、すなわちハイデガーがなぜ「挫折」したかを明らかにすることに等しい。なぜなら、現存在分析論から現存在の「メタ存在論」への「転回」を遂行するという構想は、実際には実現することの不可能な構想だったからである。

この転回を不可能にしている原因は、『存在と時間』における「頹落」解釈のあり方にある。ハイデガーはすでに『存在と時間』でも、頹落は決して単なる個人の怠慢や誤謬に起因する現象ではなく、古代ギリシャ以来の西洋の歴史の本質に起源を有する必然的な現象であると考えている。しかし他方で彼は、個人としての現存在が「良心を持つと意志すること」によって頹落が打破され、本来の実存が実現されるとも考えている。

- ・〈頹落の歴史的必然性〉の思想と、〈思考の各自的遂行〉の思想とを整合的に両立させるためには、－
- ・〈存在そのものがいかに現前するか〉と、〈思考が存在をいかに開示するか〉とを厳密に区別して扱う必要がある。
- ・〈とき性〉と〈時間性〉との区別は、まさにこの区別を行なうための概念装置だったはずである。

ところが『存在と時間』の時間性理論は、まさしくこの区別を廃棄する性格をもっている。なぜなら、「本来的時間性」と「非本来的時間性」とを、将来から時熟する時間性と現在から時熟する時間性として、つまり排他的な原理として説明するかぎり、とき性と時間性とは常に連動して本来のないし非本来的な様態をとると考えざるをえず、両者を区別する必然性は失われるからである。『存在と時間』における本来性と非本来性との思想は、〈とき性〉と〈時間性〉との区別の思想と整合しないものであり、両者を整合させなければならない「時間と存在」の「第2章」は、完成させることの不可能なものだったのである。